

太佐山高射砲陣地跡

確認調査現地説明会資料



名古屋周辺の
高射砲配置

市街地を取り囲む
ように陣地が配置
されていました。

太佐山陣地は西側
にあった平山陣地
と合わせて名和陣
地と呼ばれていま
した。

出典『戦史叢書 本土防空作戦』



令和2年(2020年)10月10日(土)
13:30~15:30~

主催：東海市教育委員会 協力：株式会社四門名古屋支店

調査でわかったこと

- ・位置が不明だった砲座の位置を確認することができた。
- ・地下式兵舎の位置を確認し、構造も一部判明した。
- ・狭い尾根を削り、土を運んで平坦面を作り出す大規模な造成工事を行っていたことが分かった。
- ・終戦後、砲座等を埋めていることが分かった。

今後の課題(まだ分かっていないこと)

- ・通信施設や観測施設など、指揮施設の位置や構造
- ・砲座周辺の待機所や砲側弾薬庫、電気配線の構造
- ・兵舎や事務所の位置・構造 などなど

太佐山高射砲陣地関連年譜(てんりゅう隊陣中記より抜粋)

駐屯していた部隊は、第13方面軍 高射第2師団 第124連隊 第2大隊 第7中隊で、てんりゅう隊と呼ばれていました。このため陣地もてんりゅう隊陣地と呼んでいたようです。

- S19(1944)
- 10月 名和村付近の「海を眺望可能なる地」に陣地構築下命・太佐山に陣地構築開始。長光寺を宿舎にする。
 - 10月下 陣地へ移動。高射砲を木造仮設砲床に据付。
 - 12月 名古屋空襲。てんりゅう隊B29を1機撃墜。以後空襲多数
- S20(1945)
- 2月 弾薬規制が始まる。
 - 早春 米軍上陸の誤報。竹槍作成の記録
 - 3月 米軍焼夷弾による市街地空襲を開始
 - 3月下 仮設砲床からセメント製砲床に変更
 - 4月 地下式兵舎、交通壕完成、事務室、炊事場も完成
 - 5月 弾薬規制が厳しくなる。射撃可能目標を見送る事態も。
 - 6月 本土決戦に備え、さらに弾薬規制が厳しくなる。
 - 7月 伊勢湾上陸に備えた水平射撃訓練始まる
 - 8.15 玉音放送を聞く。大半の兵は即時に降伏と理解できず。
 - 8月下 復員が始まる。残務整理に20名が残る。
 - 12月 米兵7名が武装解除に来る。周囲300mの立ち退きを命じ、砲尾などの重要部を爆破、1日で武器弾薬の引き渡し完了。

太佐山高射砲陣地跡とは

今から75年以上前の太平洋戦争末期、名古屋南部の工場地帯へ来襲する爆撃機から守るためにつくられた軍事施設の跡です。こうした跡を戦争遺跡と呼んでいます。

高射砲陣地とは

高射砲とは地上から航空機を狙うための大砲で、太佐山高射砲陣地跡には「九九式八糎高射砲」という高射砲が6門設置されていました。また、高速で飛行する航空機を大砲で撃墜するためには様々な設備が必要です。太佐山高射砲陣地跡には観測装置や通信装置、指揮所などが設けられ、兵舎などもあったことが分かっており、陣地全体が残る戦争遺跡として貴重な遺跡です。

調査の目的

太佐山高射砲陣地跡は、緑陽公園の予定地内に所在することから、どのような遺跡であるかを確認するために今年度測量調査と発掘調査を実施しています。



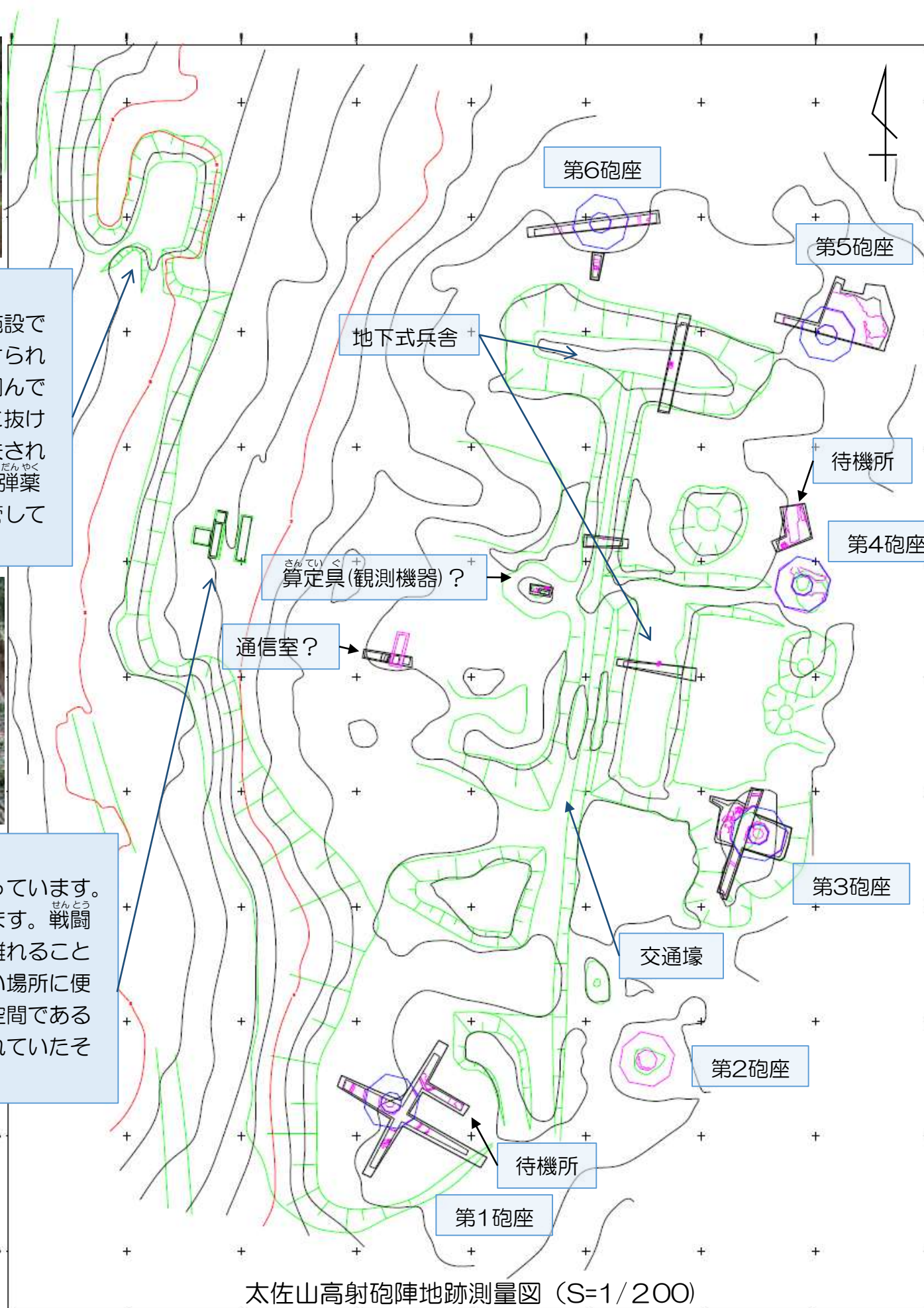
弾薬庫

高射砲弾を保管しておくための施設です。陣地から離れたところに設けられていました。周囲を高い土塁で囲んでおり、万一爆発しても爆風が上に抜けて、被害を少なくするように工夫されていました。前もって2発入りの弾薬箱を砲座へ運び砲側弾薬庫で保管していました。



便所

コンクリート製の基礎部分が残っています。くみとり式の便槽がよく分かります。戦闘配備中や通信兵などは持ち場を離れることができなかつたので、陣地に近い場所に便所が設けられたようです。日常空間である兵舎周辺にも別に便所が設けられていたそうです。



太佐山高射砲陣地跡測量図 (S=1/200)

砲座

6門の砲座（砲床とも）が見つかりました。いずれもコンクリート製で、陣地の東側に扇状に配置されています。本来は掩体という土塁に囲まれていたはずですが、戦後砲座が埋められた際に削られています。砲座中央の穴は電気配線用の穴で、周辺の12個の穴やボルトは高射砲を固定するためのものです。砲座の周りには砲側弾薬庫や待機所があり、一部を確認しています。各砲座は算定具（観測機器）等と接続され、観測結果に基づいて電氣的に目標数値が指示される仕組みになっていました。

地下式兵舎

第6砲座の南側と、第3・4砲座の西側にあります。調査では深く穴を掘り、建物を建てていることがわかりました。資料によれば屋根にアスファルトルーフィング（厚紙にアスファルトなどを塗った防水材）を貼り、土をかぶせて偽装していたようです。コンクリートの床材などが見つかりました。

観測班・通信所

陣地の西側は砲撃を指揮するための半地下式の施設があったとされます。通信所や観測機器を設置したと思われる所を発掘調査しましたが、はっきりとした成果がありませんでした。施設自体も戦後に崩されており、地表からはよくわかりません。今後の課題です。

交通壕

陣地を南北に横切る長さ約45mの溝状の遺構です。それぞれの砲座や兵舎と接続しており、中央では指揮施設とも接続しています。半地下式の通路とみられ、この陣地の重要な施設の一つです。